スラブ・ユーラシア研究センターニュース　季刊　2016年 冬 号

SLAVIC-EURASIAN RESEARCH CENTER NEWS

No. 144　February 2016

研究の最前線

◆　センター設立 60 周年記念国際シンポジウム・祝賀会開催される　◆

第 4 セッションのようす

2015 年 12 月 10 日・11 日の両日センター大会議室で、センター設立 60 周年を記念した国際シンポジウム「歴史と記憶の間：世代を超えて考える」が開催されました。センターの前身組織が 1955 年に設立されたときの具体事情や社会的背景を振り返りながら、20 世紀の世界史のコンテクストで日本のスラブ地域研究の歩みとセンターの活動史を再考するというのが全体の趣旨。センターの現外国人研究員による第 1 セッション「生活とテキストへの複合的アプローチ：中央ユーラシア地域研究の学際性（ラウンドテーブル）」から、内外の諸学界、諸分野の専門家による第 6 セッション「ICCEES 2015 を終えて：日本のスラブ・ユーラシア研究の将来（ラウンドテーブル）」まで、6 セッションと最終討論でプログラムが構成されました。

センターの歴史に直接関わるものとしては、まず第 2 セッション「スラブ・ユーラシア研究センターの設立とロックフェラー財団」で、第 2 次大戦後の地域研究の勃興と、それに果たした米ロックフェラー財団の役割を論じつつ、当センターの設立時の状況が検討され、その過程でいくつかの興味深い史実が紹介されました。続く第 3 セッション「時空を超える SRC：過去とのつながり、海を隔てた絆（ラウンドテーブル）」では、外川継男名誉教授はじめ過去に専任として勤めた諸先輩および学術交流のあった海外の研究所の代表が、それぞれの目から見たセンターの活動史を語るという、将来の世代にとっても貴重な試みが実現しました。

後半の議論は 20 世紀史をめぐってより広く展開され、第 4 セッション「センター設立 60 周年の歴史的文脈：他のアニバーサリー／記念行事との対照から」では、第 2 次大戦前夜の杉原千畝の活動、および 1955 年前後の日本の外交と日露関係が、第 5 セッション「歴史と記憶をつくるアニバーサリー」では、ロシアの第 1 次世界大戦と革命の問題、およびチェコ共

和国の記憶の政治におけるユダヤ人の位置の問題が、それぞれアニバーサリー（記念年）という観点に絡めて論じられました。

最終第 6 セッションでは、昨年の ICCEES 幕張大会の組織者を中心とした国内関連学界の代表と、中国、韓国、ロシアの諸分野の専門家から、日本のスラブ・ユーラシア研究の将来をめぐって様々なヴィジョンや提言が発せられました。

内外から約 110 名の参加者を得て、シンポジウムは盛況裡に終了しました。

なお国際シンポジウムに先だって前日の 12 月 9 日に、以下の 2 つのプレシンポジウムがおこなわれました。

Middle-Eastern Migration/Refugees and European Integration from Eurasian viewpoints (Organizer: Ieda Osamu)

Colonial Revolt and State-Society Relations: Russian Central Asia and British India Compared (Organizer: Uyama Tomohiko)

10 日の夕方にエンレイソウで開かれた記念祝賀会では、山口佳三総長、石崎宏明文科省研究振興局学術機関課学術研究調整官、和田春樹東京大学名誉教授、アンドレイ・ファブリーチニコフ在札幌ロシア総領事をはじめとする多くの方々から、祝辞が述べられました。祝賀会には、総長、理事、部局長をはじめとする北大の教職員、センターの共同研究員、他大学の研究所・センター関係者など、100 名を超える出席者がありました。かつてセンターで一緒に働いた多くの教員や職員の皆さんが出席してくださったことは大変嬉しいことでした。祝賀会も終始和気あいあいとした雰囲気のなかで終えることができました。以下は 2015 年 12 月 10 ～ 11 日のプログラムです。［望月］

Slavic-Eurasian Research Center 2015 Winter International Symposium

Between History and Memory: Connecting the Generations at SRC

December 10 (Thursday)

Opening Remarks: Shinichiro TABATA (SRC); Introduction: David WOLFF (SRC)

Session 1: Multiple Approaches to Life and Text: Interdisciplinary Central Eurasia (roundtable)

Daniel PRIOR (Miami University/SRC) “The Kirghiz Epic Tradition and Its Contexts”

Tokhir KALANDAROV (Russian Academy of Sciences/SRC) “Анализируя среднеазиатские антропологические работы по религии: пережитки доисламских верований или между «народным» и «чистым» исламом?” (in Russian)

Stefan KIRMSE (Humboldt-Universität zu Berlin/SRC) “A View from Russia’s Borderlands: Potentials and Limits of Studying 19th-Century Legal Texts and Culture”

Moderator: Norihiro NAGANAWA (SRC)

Session 2: The Founding of the SRC and the Rockefeller Foundation

David ENGERMAN (Brandeis University: absent), read by T. Hasegawa “Knowing Friends and Enemies: The World War II Origins of Area Studies in the United States”

David WOLFF (SRC) “The SRC and the Rockefeller Foundation, 1948-1952”

Masato KARASHIMA (Kwansei Gakuin University) “Between Anti-Communist Liberal and Democratic Socialism: The Rockefeller Foundation and Japan’s Asian Studies”

Discussant: Nobuo SHIMOTOMAI (Hosei University); Chair: Tetsuro CHIDA (SRC)

Session 3: SRC in Time and Space: Ties to the Past, Links Across the Sea (roundtable)

Tsuguo TOGAWA (Sophia University and Hokkaido University, emeritus) “The SRC in the Cradle: A Prehistory”

Takako AKIZUKI (Former SRC librarian) “Building the Slavic Collection at the SRC”

Takayuki ITO (Waseda University and Hokkaido University, emeritus) “Nationalization, Internationalization, Functionalization: My Twenty Years at SRC”

Tsuyoshi HASEGAWA (University of California, Santa Barbara) “SRC in Time and Space”

Viktor LARIN (Institute of History, Archaeology and Ethnography of the Peoples of the Far East, Far Eastern Branch, RAS) “Vladivostok Institute of History and the Slavic Research Center: Three Decades of Fruitful Cooperation”

Shinichiro TABATA (SRC) “SRC in the 21st Century”
Moderator: Tetsuo MOCHIZUKI (SRC)

December 11 (Friday)

Session 4: Other Anniversaries and Their Shared Context with SRC 60

Chizuko TAKAO (Tokyo Medical and Dental University: absent) and David WOLFF (SRC) “Visas for Life: Chiune Sugihara, 1935-41”
Yasuhiro IZUMIKAWA (Chuo University) “Japan’s Multiple Quests for Foreign Policy ‘Independence’ and Soviet-Japanese Diplomatic Normalization Talks in the 1950s”
Discussant: Haruki WADA (University of Tokyo, emeritus)
Chair: Hiroshi KIMURA (Takushoku University and Hokkaido University, emeritus)

Session 5: Anniversaries as a Maker of History and Memory

John W. STEINBERG (Austin Peay State University) “Russia’s Great War and Revolution: Will It Forever Be an Unknown War That End’s with a Forgotten Peace?”
Taku SHINOHARA (Tokyo University of Foreign Studies) “Jewish Presence and Non-presence in Memory Politics in Central Europe”
Discussant: Yoshiro IKEDA (University of Tokyo)
Chair: Shugo MINAGAWA (Hokkaido University, emeritus)

Session 6: After ICCEES 2015: The Future of Japanese Slavic-Eurasian Studies (roundtable)

Mitsuyoshi NUMANO (University of Tokyo)
Natsuko OKA (Institute of Developing Economies)
Yoshiro IKEDA (University of Tokyo)
Yaroslav SHULATOV (Hiroshima City University)
FENG Shaolei (East China Normal University)
HA Yong Chool (University of Washington)
Moderator: Tadayuki HAYASHI (Kyoto Women’s University)
Concluding Discussion: Moderator: David WOLFF (SRC)

祝　辞

北海道大学総長　山口佳三

北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター創立 60 周年の式典開催にあたり、北海道大学を代表して、来賓の方々をはじめ数多くの皆様の出席を賜ったことに心からお礼を申し上げます。

現在のスラブ・ユーラシア研究センターの前身は、法学部附置という組織でしたが、発足当初から将来的な全国共同利用を目指し、部局横断的な連携により、センターの専任教員だけではなく、複数の部局の先生方、学外の優れた研究員により運営されてきました。

センターは、1978 年に学内共同教育研究施設、1990 年に全国共同利用施設に改組された後、2010 年にはスラブ・ユーラシア地域研究の共同利用・共同研究拠点に認定されました。こうした実績が認められ、2008 年から新学術領域研究、その翌年からはグローバル COE という大型のプロジェクトを実施しております。

このうち、グローバル COE は、境界研究（border studies）の拠点を本学に作るというものであり、スラブ・ユーラシア研究センターを核として、文学、経済学、法学をはじめとする文系のすべての研究科や博物館などの教員を結集して、全学的な取り組みがなされました。大学としても総力を挙げて、サマースクールや、若手時限ポストの供与、英文雑誌刊たなど

の支援を行った結果、グローバル COE の事後評価において「設定された目的は十分に達成された」という最高の評価を受けたことを誇りに思っております。

さらに、スラブ・ユーラシア研究センターは、グローバル COE と新学術領域研究という大型のプロジェクトを成功させたことなどが高く評価され、共同利用・共同研究拠点として S 評価を受けております。

昨年（平成 26 年）には、研究対象とする地域の拡大に合わせ、スラブ・ユーラシア研究センターに改称し、来年度からは、北東アジア研究についても、日本における拠点の 1 つとして、人間文化研究機構などと共同研究を進めると聞いております。本学としましても、センターが日本における地域研究（area studies）の国際的な拠点として発展していくための可能な支援をしたいと思っております。

センターは教育面におきましても、2000 年から文学研究科に協力講座をおいて本格的な大学院教育に着手しており、修士課程の入学者は 10 名に満たないものの、その大半が道外から入学していること、留学生の多くが、ロシアを含む欧米から来ていることなど、本学の他の大学院とは異なる特徴を有しており、本学における大学院教育の高度化や国際化に大きく貢献しております。

また、本学が重視している北極、北方、あるいはロシアに関わる教育研究活動に関しましても、センターが大きな役割を果たしております。特に、今年度創設された北極域研究センターは、人文社会科学系の北極域研究を進めることを大きな目標の 1 つとしておりますが、この点におけるセンターの役割は非常に大きなものとなっております。

さらに、世界展開力事業として行っている、ロシア極東の 5 大学との教育交流プログラムにも貢献していますし、本学が力を入れている観光学に関しましても、国境観光といった新しい切り口で取り組みを行っております。

最後になりますが、ご紹介のとおりセンターの活動は多岐にわたっており、本日出席の皆様には、これまでと変わらぬ応援をお願い申し上げますとともに、スラブ・ユーラシア研究センターの今後の一層の発展を祈念いたしまして、私の挨拶とさせていただきます。

祝　辞

文科省研究振興局学術機関課　学術研究調整官　石崎宏明

本日は北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター設立 60 周年、誠におめでとうございます。

本センターは皆様ご存知の通り、昭和 30 年に、前身となる「北海道大学法学部附属スラブ研究所」として、スラブ地域に関する総合的研究を推進するために創設され、平成 2 年には全国共同利用の研究施設として改組されておられます。

また、平成 26 年には、スラブ・ユーラシア地域研究の拠点としての位置づけを明確にされるということで、現在の「スラブ・ユーラシア研究センター」に進化をされております。

現在グローバル化が進展しており、国際情勢が流動化する中、地域研究の重要性はますます高くなってきております。特に、新興国の発展、それらが国際社会に大きな影響を与えている状況で、資源国であるロシア、それから中央ア

ジアの位置付けが非常に高くなってきております。その中で、スラブ・ユーラシア世界の動向に世界の注目が集まっております。

本センターではこのような状況を予想されたかのように、スラブ地域を研究する我が国唯一の研究機関としまして、山口総長からもご紹介がありましたように、COE、それから 21 世紀 COE プログラム、新学術領域研究、グローバル COE プログラムなど、数多くの大型プロジェクトを実施され、多大な研究成果を残されております。また、平成 22 年には「共同利用・共同研究拠点」としての認定を受けられ、期末評価で最高の評価を得られるなど、卓越した研究拠点としての実績を挙げられてきておられます。

本センターがスラブ･ユーラシア地域研究におきまして、長年に渡り高い研究水準を維持し、多くの研究成果をあげておられることは、山口総長、それから田畑センター長をはじめとする歴代の総長、センター長並びに関係の皆様方のたゆみないご努力の賜物であると深く敬意を表する次第です。

現在、我が国を取り巻く社会･経済環境は大きく変化しております。新たな未来を切り開き、我が国の持続的発展を実現するためには、科学技術イノベーションを推進し、社会を支える新しい価値の創造が不可欠となっております。

社会を支える新しい価値の創造のため、学術研究が担う役割は大変重要です。国立大学には、基礎研究・基盤研究の推進、そして将来の日本を担う人材の育成など多岐に渡る役割が求められています。

このような中、文部科学省でも、各国立大学の強み・特色を最大限に生かし、自ら改革・発展する仕組みを構築することにより、持続的な「競争力」を持ち、高い付加価値を生み出す国立大学の改革を推進しているところです。

北海道大学におかれては、世界と戦える分野を形成・強化し、世界トップレベルの研究拠点の形成と新たな研究領域の開拓を通じ、高度な学術成果の持続的創出に取り組んでおられると聞いております。

本センターが、スラブ・ユーラシア地域研究分野における世界トップレベルの研究拠点として、引き続き我が国の学術研究をリードし、北海道大学の強み・特色をより一層強化・発展させ、研究教育力の向上にも貢献されることを強く期待しております。また、その研究成果を広く社会にわかりやすい形で還元され、我が国の政策形成などに資すると共に、我が国の発展を支える知の基盤としての役割も果たされることを期待しております。

最後に、北海道大学とスラブ・ユーラシア研究センターの更なるご発展と、ご出席の皆様方の益々のご活躍を祈念いたしまして、お祝いの言葉とさせていただきます。本日はどうもおめでとうございます。

◆　センター設立 60 周年記念プレシンポジウム　◆
「ユーラシアから見た中東難民と欧州統合」の開催

センター設立 60 周年記念シンポジウムのプレ企画として、昨年 12 月 9 日に、中東難民問題を取り上げた標記の国際シンポジウムが開催されました。

欧州は昨年来、中東難民問題をめぐって混乱の渦中にあり、さらには連続テロがパリで発生するなど、欧州統合の根幹が揺らいでいます。今も中東から欧州をめざす人の大移動が止みません。しかし、欧州と中東をめぐる人の大移動は今回が初めてではありません。

第二次世界大戦後だけを取り上げても、ナチスの収容所から解放された数十万のユダヤ人が行き場を失って難民化し、パレスチナに「永住の地」を求めて移動しました。これが中東戦争の発端であり、ある意味では今回の中東難民問題の出発点であるともいえます。

また欧州の内部ではありますが、1989 年には東ドイツ市民が西ドイツへの移住を求めてハ

ンガリー・オーストリア国境で難民化し、東西の壁が崩壊して冷戦が終結しました。

巨大な難民の流れは世界史に転換点を生み出します。現シリア難民に象徴される大移動は、中東戦争に始まり湾岸戦争を経てシリア内戦へと続く長い戦乱と日常崩壊の帰結ですが、中東難民の行く手には、また欧州統合にはどのような未来が待っているのでしょう。

こうした問題意識から、上記の国際シンポジウムがセンターの家田と仙石の呼びかけで企画され、若手研究者の誠意と熱意で実現されました。

プログラムは以下の通りで、登壇者には内外の地域研究者だけでなく、外交官や報道の専門家も加わりました。

First Session "Middle East and Europe in a historical perspective"

KUROKI Hidemitsu (Tokyo Univ. of Foreign Studies): An inevitable wave?: Syrian (and Lebanese) migrants to Europe in historical context

NOSAKA-SAHARA Junko (Bilkent Univ.): Rethinking 200 years of refugees and migrants on the Black Sea coast

Basak KALE (Middle East Univ. of Technology): Comparing Migration Management through the lenses of mass refugee movements: EU and Turkey（online presentation through Skype）

EMDO Ken (Hokkaido Univ.): European integration in the face of the refugee crisis

Chair: IEDA Osamu (Hokkaido Univ.), Discussant: Sahara Tetsuya (Meiji Univ.)

Second Session: "Middle East refugees and European integration" (Roundtable)

IMAI Kohei (Meiji Univ.): The effectiveness and limit of Turkey's humanitarian diplomacy: The case of response to Syrian refugee

SZERDAHELYI István, Hungarian Ambassador to Japan

Bostjan BELTALANIC (Josai Univ.): The refugee situation from the Slovenian and wider Balkan perspective

KUBOYAMA Ryo (Senshu Univ.): Refugee Policy and Politics in Germany

SENGOKU Manabu (Hokkaido Univ.): European migrant crisis and general election in Poland

Chair: MINAGAWA Shugo (Professor Emeritus, Hokkaido Univ.)

Third Session: "Refugee issue and the world" (Roundtable)

Hans Carl von WERTHERN, Ambassador of Federal Republic of Germany to Japan

UMEHARA Toshiya (Asahi Shinbun), Year 2015 for EU: An "Annus Horribilis" or Beginning of the End

MORITA Tsuneo (Tateyama R&D, Hungary): Reality seen from Hungary

NISHIKIDA Aiko (Tokyo Univ. of Foreign Studies): The choice to move: Palestinian refugees' migration to European countries

Deha ERPEK（Minister Counsellor of Turkish Embassy）

Chair: OTSURU Atsushi (Kobe Univ.)

今回の国際シンポジウムでは難民を送り出した中東の内部事情、難民の受け入れをおこなった欧州各国の事情、そして両者の中間に位置するトルコの立場が詳細に報告されましたが、特に注目されるのはトルコの重要性です。シリア難民は700万を超えますが、周辺国に400万人が逃れ、過半がトルコに向かいました。トルコでは安全を確保されましたが、身分は「お客様」のままだったため、長期的な生活の展望を見出せませんでした。このためシリア難民は市民権の得られる欧州をさらに目指すことになったという構図が浮かび上がりました。

そもそも中東難民をめぐっては、「難民に冷たいハンガリーや東欧」、「難民に温かいドイツ」という論調が、マスコミ報道によって作り上げられたことが発端でした。しかし、これは事態の本質を捉えていないことが、シンポジウムで明らかになりました。難民をめぐる欧州内での混乱の背後には、EUの基本理念に関する加盟国間での理解や立場の相違があります。従来の欧州統合の規則を遵守しようとしたのがハンガリーやそれに倣う中欧、東欧諸国です。他方、人道主義を標榜しつつ、地域統合を中東に拡大し、一気に「人の移動」にまで進展させようと大きく舵を切ったのがドイツだったと言うべきでしょう。

ともあれ、中東難民問題は現在進行中のシリア和平会議が象徴しているように、中東諸国や欧州だけでなく、大国の利害や思惑がうごめいています。今回の札幌でのシンポジウムは始まりであり、今後も全国、そして国際的規模で難民問題に関する議論を継続してゆきます。

中東専門家黒木英充氏の報告

ハンガリー大使セルダヘイ氏の報告

まずは第二回を 3 月 24 日に東京お茶の水の明治大学で開催いたします。詳細は改めてセンターのホームページなどでご案内します。

今回のシンポジウムでは、参加者の中から有志により、次の札幌宣言に署名がなされ、こちらも今後の難民シンポジウムの継続に合わせて、賛同者を募ってゆくことになりました。

札幌宣言：「本日、私たちは、中東難民問題について、それぞれのもつ学識、経験、志を集めてここにつどいました。本日を始まりとして、今後も力と心を合わせ、世界の安定と、世界のあらゆる人命尊重のために全力を尽くします。

ともにすすみましょう。札幌にて、2015 年 12 月 9 日

Bostjan BERTALANIC、Deha ERPEK、Basak KAKE、Nanae OSANAI、SZERDAHELYI Istán、Hans Carl von WERTHERN、赤尾光春、家田修、家田裕子、伊東孝之、井上紘一、今井宏平、岩田昌征、梅原季哉、遠藤乾、王俊、大津留厚、小山内道子、久保山亮、黒木英充、佐原徹哉、佐藤雅彦、錦田愛子、野坂潤子、橋本聡、藤田昌介、朴任哲、皆川修吾、盛田常夫。」

最後になりましたが、今回の国際シンポジウムでは札幌に移住した自主避難者という「原発難民」の方々など、市民の皆様からお力添えを頂きました。ここに記して感謝の意を表します。［家田］

◆　岩下・宇山両教授が北大の研究総長賞を受賞　◆

岩下明裕教授と宇山智彦教授が 2015 年度の研究総長賞を受賞しました。受賞は、「本学を代表するに足る優れた研究業績をあげ、競争的資金等を獲得し、本学の学術進歩に著しく貢献した」ことによるもので、岩下氏は優秀賞、宇山氏は奨励賞を受けました。センターの研究活動が北大からも評価されたということで大変喜ばしいことです。なお、全体では，優秀賞は 9 名、奨励賞は 42 名の方が受賞しました。［田畑］

総長賞授賞式

◆　ボーダースタディーズ福岡シンポジウム「領土という『呪い』を考える」開催　◆

昨年 11 月 23 日、九州大学箱崎キャンパスにて、九州大学アジア太平洋未来研究センター（CAFS）と UBRJ の主催で、ボーダースタディーズ福岡シンポジウム「領土という『呪い』

おもな参加者

を考える」が開催されました。シンポジウムは3つのセッションに分かれ、最初に政治地理学の世界的権威であるジョン・アグニュー（カリフォルニア大学ロサンゼルス校）が「グローバル化の時代の地政学」と題する基調講演をおこないました。その後、第2セッションは「主権への挑戦：対立する領域を超えて」と題し、岩下明裕（センター）らが登壇。第3セッションでは、「ボーダーをアートする」と題し、境界と表象の問題について議論されました。これまでのUBRJ主催行事の中でもっとも「地理学的」な方向性が強く出た行事であり、80人を超える参加者が活発な議論を展開しました。円滑なシンポジウムの進行に奮闘していただいた、CAFSの皆様に感謝申し上げます。［地田］

◆　スロヴェニア大使がセンターを訪問　◆

シモナ・レスコヴァル駐日スロヴェニア共和国大使が1月29日にセンターを訪問されました。大使は昨年10月に着任され、今回は、30-31日に札幌で開催されたスキー男子ジャンプワールドカップに合わせての初めての札幌訪問ということでした。大使は、リュブリャナ大学をはじめとするスロヴェニアの大学と北海道大学あるいはセンターとの交流の進展に務めたいという希望を語られました。センターからは、野町准教授がこれまでの同国との研究交流などについて話をしましたが、大使は大きな関心を示されました。30日のスキージャンプでは、スロヴェニア勢が金銀銅を独占し、大使の札幌訪問はその面でも成功裏に終わったようです。［田畑］

シモナ・レスコヴァル駐日大使（中央）

◆　2016年度「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究」に関する公募結果　◆

2015年度と同様に、「プロジェクト型」の共同研究、「共同利用型」の個人による研究、センターが設定した課題による「共同研究班」の班員の募集をおこないましたが、2015年12月12日の共同利用・共同研究拠点課題等審査委員会において応募者を審査した結果、以下の方々が採択されました。［山村］

2016年度採択者一覧

1「プロジェクト型」の共同研究

	申請者氏名	所属機関・職	研究課題名
1	杉本　良男	国立民族学博物館民族文化研究部・教授	ユーラシア地域大国における聖地の比較研究
2	中澤　敦夫	富山大学人文学部・教授	ロシア正教古儀式派の歴史と文化の総合的研究
3	野部　公一	専修大学経済学部・教授	ポスト・スターリン期のロシア農村における近代化と生活水準に関する研究
4	森下　嘉之	茨城大学人文学部・准教授	東欧の「境界（ボーダー）」における領域性・空間認識の比較研究：チェコスロヴァキアおよびハンガリーを事例に

2「共同研究班」の班員

	申請者氏名	所属機関・職	テーマ
1	笹原　　健	麗澤大学、成城大学、都留文科大学・非常勤講師	②スラブ・ユーラシアにおける言語接触・言語圏に関する共同研究
2	花松　泰倫	九州大学持続可能な社会のための決断科学センター・講師	③スラブ・ユーラシア地域を中心とする境界・国境研究
3	佐藤嘉寿子	帝京大学冲永総合研究所・助教	④スラブ・ユーラシア地域における「ポストネオリベラル期」の経済政策比較
4	松澤　祐介	西武文理大学サービス経営学部・准教授	④スラブ・ユーラシア地域における「ポストネオリベラル期」の経済政策比較
5	松本かおり	神戸国際大学経済学部・准教授	④スラブ・ユーラシア地域における「ポストネオリベラル期」の経済政策比較

3「共同利用型」の個人による研究

	申請者氏名	所属機関・職	研究課題名
1	伊藤美和子	神戸大学・非常勤講師	ヴィゴツキーの発達論におけるトルストイの文学作品と教育論の役割
2	梅村　博昭	記載なし	R・S・カッツ（R・アルビトマン）『ソヴィエト SF 史』の余波
3	大槻　忠史	群馬大学・非常勤講師	1920-30 年代のロシア自由主義経済学と日本の経済学：A. V. チャヤーノフを中心に
4	小椋　　彩	東京大学大学院人文社会系研究科・研究員	戦間期パリの亡命ロシアと亡命ポーランドの関係について
5	塩谷　哲史	筑波大学人文社会系・助教	伊犁通商条約（1851 年）から見たロシア帝国の対清外交
6	白村　直也	内閣府日本学術会議事務局・学術調査員	チェルノブイリ原発事故と被災地における学校が担った役割
7	吉村　貴之	早稲田大学イスラーム地域研究機構研究院・准教授	コーカサス 3 国の体制転換比較

◆　専任・非常勤研究員セミナー◆

ニュース前号以降、専任研究員セミナーが以下のように開催されました。

11 月 17 日：**ウルフ・ディビッド** “The SRC and the Rockeffeller Foundation, 1948-1952”

ウルフ氏のセミナー原稿は、12 月のセンター 60 周年記念シンポジウムのセッション 2「ス

ラブ・ユーラシア研究センターの設立とロックフェラー財団」の報告用に準備された草稿でした。スラブ・ユーラシア研究センターの前身である研究室が 1953 年に設立されたことはよく知られていますが、設立に至るまでの経緯はこれまであまり語られることがありませんでした。ウルフ氏は日本語と米国の資料を駆使して、米国がセンター設立にむけて関わった様相をひもときました。本報告の資料収集には地田徹朗助教も加わっており、いわばセンターのチームとしての自らへの対話作業となりました。長くセンターにいるスタッフとの間での議論は、推理小説を読み解くようなスリリングな展開でした。［岩下］

11 月 17 日：**菊田悠**「中央アジアからの労働移民について」
コメンテータ：藤本透子（国立民族学博物館）

菊田氏の提出論文は中央アジアからの労働移民について論じたものです。移民先でのネットワーク形成や移民元の故郷の社会的変化などが文化人類学的な視点から分析されており、コメンテーターの藤本氏からは肯定的に評価されました。グローバリズムの全般的影響と移民による変化を峻別する必要性、ISIS と労働移民の関係、移民先の地域による差異（ロシアと日本・韓国）について活発な議論がかわされました。［越野］

12 月 3 日：**長縄宣博** “An Imperial Pathway: Karim Khakimov in the Southern Urals, Turkestan, and Iran (1919–1921)”
コメンテータ：西山克典（静岡県立大学）

本論文は、現バシコルトスタン出身のタタール人革命家・外交官で、オレンブルグからタシケント、ブハラ、イラン、アラビア半島へと活動の場を移していったカリム・ハキモフを主人公とし、主に中央アジアにおける彼およびタタール人活動家全般の活動を扱ったものです。ロシア帝政期についてよく言われる、中央アジアに対するタタール人の「仲介者」としての役割を、ソヴィエト期に敷衍させることが論文の主要な観点となっています。タタール人活動家と中央アジア人活動家の間には相互の批判・不信感も存在し、仲介者の役割が必ずしもスムーズに果たされたわけではありませんが、ムスリムであり、なおかつ中央アジア人とは違い帝政期から兵役の経験があるタタール人が、赤軍ムスリム部隊の形成を指導したという指摘は、なるほどと思わせます。論文のもう一つの主張である、ハキモフの中央アジアでの活動と中東での活動の連続性、広くはロシア内戦と対中東ソヴィエト外交の連続性については、本論文では具体的な論証まではなされていませんが、今後の成果が期待されます。コメントでは、ソヴィエト・ロシア中央の指導者・諸グループとの関係という論点も提起されました。［宇山］

12 月 21 日：**岩下明裕**「ボーダースタディーズ：現場・理論・提言」
コメンテータ：古川浩司（中京大学）

今回提出されたペーパーは 100 頁を越える力作で、2016 年に刊行予定の日本初となるボーダースタディーズの概説書の原稿でした。岩下氏は本書を一般向けと位置付けており、ボーダースタディーズの国内外の研究史や各学会の動向の紹介をわかりやすくしていますが、主要な部分は主に岩下氏自身の活動・研究成果に基づくもので、概説書を越えた独自性の高い著作であり、領土問題、国際関係、国境観光など様々なトピックを含んでいます。今回のコメンテータは同じく国境研究に取り組む古川氏で、古川氏からは、日本の国境問題の現状を踏まえたうえで、実践面と理論面の双方に貢献する著作と考えられ、同時に初学者にも読みやすい概説書と高く評価されました。その一方で、ボーダースタディーズそのもの定義の問題、海と陸の国境の扱いの同異についてなど様々な疑問点も出されました。出席者からも概ね高い評価を得ましたが、章ごとの関連性がまだ不明瞭であること、個々の歴史的事実の解釈が一面的であるなど、今後の改稿の際に検討が求められる重要な問題も指摘されました。［野町］

1 月 29 日:**越野剛**「災厄によって災厄を思い出す:ベラルーシにおける戦災と原発事故の記憶」コメンテータ：半谷史郎（愛知県立大学）

今回提出されたペーパーは、ベラルーシが経験した第 2 次世界大戦とチェルノブイリ事故が、記憶としてどのように重なって現れるかということを、小説・映画・モニュメントなどを題材に明らかにしたものです。コメンテータの半谷氏からは概ね高く評価されたものの、記憶を公的と私的なものとして対立させる越野氏の主張には再検討の余地があることなどが歴史学の視点から示されました。参加者からはソ連各地での類似事例との比較研究の有効性などが指摘されました。［野町］

◆ 2016 年度鈴川・中村基金奨励研究員募集中 ◆

鈴川・中村基金の奨励研究員制度は、鈴川正久氏と中村泰三氏からのご寄付を活用して、大学院で学ぶ方々にセンターの施設や人材をご利用いただくことを主旨としたものです。この制度を利用して、これまでに多くの大学院生がスラブ・ユーラシア研究センターに滞在し、センターおよび北大附属図書館の文献資料の利用、センターで開催されるシンポジウム・研究会への参加、センターのスタッフとの意見交換をおこない、実りのある成果を挙げてきました。

2016 年度も昨年同様に募集をおこないます。募集人数は若干名とし、助成対象者は原則として博士後期課程の大学院生です。助成期間は 1 週間以上 3 週間以内です。滞在期間は、原則として 2016 年 7 月から 2017 年 2 月の間。センターの行事をご勘案の上、時期と期間を選んで応募してください。最終的な日程の調整は、採用後ホスト教員とおこなうことになります。滞在中に一度、自身の研究について発表することが義務づけられます。公募締め切りは 4 月末、選考は 5 月中におこなわれ、結果が通知されます。募集要項・応募用紙はセンターのホームページで参照およびダウンロードできます。ふるってご応募ください。［家田］

http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/applications/index4.html

◆ 研究会活動 ◆

ニュース 143 号以降、センターでおこなわれた諸研究会活動は以下の通りです。［大須賀］

11 月 18 日 Paul Du Quenoy（センター）“Alexander Serov and the Birth of the Russian Modern”（SRC 特別セミナー）

11 月 19 日 Raja Mohan（オブザーバー・リサーチ財団、インド）“India and the Asian Balance of Power”（UBRJ セミナー）

11 月 28 日 Legal Pluralism in Imperial Crimea, Middle Volga, and Kazakh Steppe Pavel Shabley（センター）“Адат и шариат в Казахской степи: Кодификационный проект И.Я. Осмоловского и имперская правовая система на Сырдарьинской военно-укрепленной линии (1850-1860)”; Stefan Kirmse（センター）“Between Legal Unification and the Promotion of Difference: Muslim Tatars and the Imperial Legal System in Late Nineteenth-Century Crimea and Kazan”（北海道中央ユーラシア研究会）

12 月 1 日 **仙石学**（センター）「移民問題と 2015 年 10 月のポーランド総選挙」（昼食懇談会）

12 月 2 日 Tokhir Kalandarov（センター）“Таджикские трудовые мигранты в Москве: Адаптация к новым реалиям и трансформация традиционных ценностей [モスクワのタジク人労働移民：新しい現実への適応と伝統的価値の変容]”（SRC セミナー）

12 月 9 日 プレシンポジウム企画「ユーラシアから見た中東難民と欧州統合」
プレシンポジウム・セミナー「植民地反乱と国家・社会関係:露領中央アジアと英領インドの比較」

12 月10-11 日スラブ・ユーラシア研究センター設立 60 周年記念シンポジウム「歴史と記憶の間：世代を超えて考える」

12 月 12 日「ユーラシア地域大国（ロシア、中国、インド）の発展モデルの比較」第 2 回研究会 **丸川知雄**（東京大）「中国・新興国産業ネクサス」;**上垣彰**（西南学院大）「世界経済の中のロシア、

ソ連、再びロシア」;**佐藤隆広**（神戸大）「ロシアとインドの地方財政格差」;**田畑伸一郎**（センター）「今後の地域大国比較研究についての問題提起」
サハリン・樺太史研究会、科研「比較植民地史」合同研究会　塩出浩之『越境者の政治史』をめぐって　報告者：**塩出浩之**（琉球大）、**浅野豊美**（早稲田大）、**柴田陽一**（京都大）、**天野尚樹**（北大）

12 月 14 日　Alibay Mammadov（北大文・院）、**立花優**（北大文）「共同報告 アゼルバイジャンにおけるナゴルノ・カラバフ問題のとらえ方：強制移住者と知識人への調査から」（北海道中央ユーラシア研究会）

12 月 16 日　Pavlo Gritsenko（ウクライナ学士院ウクライナ語研究所）“Язык и культура после Чернобыля: проблемы сохранения и исследования [チェルノブイリ事故後のことばと文化：その保全と研究の諸問題]”（SRC セミナー）

12 月 17 日　**生熊源一**（北大文・院）「ロシアにとってビエンナーレとは何か」（ユーラシア表象研究会）

12 月 18 日　第 15 回スラブ・ユーラシア研究センター公開講演会　**岩下明裕**（センター）「地域を変えるボーダーツーリズム　対馬・サハリン・オホーツク」
重松尚（東京大・院）「リトアニアにおけるユダヤ人民族自治とシオニスト」（鈴川・中村奨励研究員研究報告会）

12 月 22 日　**井上岳彦**（札幌学院大）「ミハイル・ロマノフとヌルハチは兄弟だった !? カルムィク史から掘り起こすロシア仏教史の可能性」（北海道スラブ研究会）

12 月 24 日　Pavel Shabley（センター）“Межрегиональные связи мусульман Российской империи во второй половине XIX- начале XXвв. (на примере семьи Яушевых) [19 世紀後半から 20 世紀初頭のロシア帝国のムスリムにみる地域間の結びつき:ヤウシェフ家を例に]”（SRC セミナー）

1 月 19 日　**齋藤宏文**（東京工業大）「科学アカデミーはいかにトロフィム・ルィセンコを受け入れたか：ソヴィエト学界の“特進者”をめぐる一考察」（SRC セミナー）

1 月 25 日　スラブ・ユーラシア研究センター・北極域研究センター・大学院環境科学院　共催セミナー Tuyara Gavrilyeva（北東連邦大、ロシア）“Comparative Analysis of Trends in the Development of the World Northern Cities and Russia”

1 月 26 日　Alexander Bukh（ヴィクトリア大、ニュージーランド）“A Comparison between the Movements for the Return of Northern Territories and Takeshima”（客員研究員セミナー）

1 月 27 日　Kornelia Ichin（ベオグラード大、セルビア）“От авангардного взрыва - к военному [アヴァンギャルドの爆発から戦争の爆発へ]”（SRC 特別セミナー）

ヒヨドリの日々

ダニエル・プライア（マイアミ大学／センター 2015 年度特任准教授）

スラブ・ユーラシア研究センターでの 5 ヵ月の滞在の間、私はオデュッセイアよりも行数の多いキルギス（中央アジアのテュルク系民族）の叙事詩、サグンバイ・オロズバク・ウール（Sağımbay Orozbaq uulu）版の「ココトイ・ハン（Kökötöy Khan）のための記念祝宴」の英語への初めての翻訳に集中することができた。

私は困難な仕事に没頭していたが、札幌と北海道は私に多くの刺激的で魅惑的な体験を与えてくれた。鳥類はとりわけ記憶に残るものだ。バードウォッチング好きには街のいたる所で、とりわけ木の多い北海道大学のキャンパスで新たな知己と出会う機会が数多くある。鳥の多くは興味深い北海道の特徴を持ってはいるが、多かれ少なかれ北半球の他の温帯地域からの来訪者には見覚えのあるものである。

人生で何かに呼び寄せられる時に大抵そうであるように、札幌の鳥たちに注意を払うようになったのは私の選択ではなかった。到着して間もないある日の朝、時差ぼけでよく眠れなかった私は、朝の 4 時に北の夏の夜明け前に響く、あまり調律が合っていないが力強く鳴く鳥の騒々しい声で目覚めた。これがヒヨドリ（Hypsipetes amaurotis）との最初の対面であり、私は第一印象を乗り越えて、この鳥をよく知ることができるのを嬉しく思った。ヒヨドリはツグミや小さなカケスほどの大きさで、長い尻尾と細く頑丈なくちばしを持った姿勢の良い

北大外国人研究者宿舎および SRC 付近のヒヨドリ（著者撮影）

鳥である。羽は灰色で褐色がかった灰色の翼を持ち、腹には明るい斑点があり、褐色の「耳」当てを備えている。上半身、特に頭部の羽は少し逆立ち、シャワーを浴びた直後のような見た目をしている。威勢の良いヒヨドリの声は、興奮した子犬が終わることのない喜びと共に何度も噛みつくおもちゃの出す音のようである。ヒヨドリたちは群れで暮らしてはいないものの、食糧が得られる所にはどこへでも降り集まってくるため、話し相手に困ることはない。この日本と北東アジアの全域で見られる鳥は渡り鳥であるが、移動する距離は比較的短いため、札幌のどこかには常にいるものである。私は秋の間にヒヨドリの数が増えていることに気付いた。多分それらの多くは北海道北部から来ていたのだろう。10 月中旬から私が札幌を去った12月中旬まで、毎日 6 羽ほどのヒヨドリの集団が午前 10 時から午後 3 時まで、SRC の私の研究室の窓の東側から見えるイチョウの木に集まり、熟しすぎたサクランボのような木の実をうるさく音を立てて食べていた。彼らは陽気な、とめどなく興味を引く楽観的な隣人であった。私は寒さもよそに窓を開け写真を撮り、素晴らしく非音楽的な騒音に耳を傾けた。こうして私はヒヨドリの日々として SRC フェローシップの期間を思い出すのである。

ハシブトガラスは光沢のある黒い身体と大きなくちばしを持つ。この個体は換毛の時期らしく、樹上ではなく地上で休んでいる

ヒヨドリとは別に、札幌の飛び抜けて騒々しい住民は数多いハシブトガラス (Corvus macrorhynchos japonensis) である。この巨大な鳥は大学とその周りのどこにでもいるよう

SRC の私の研究室の窓の外の木に止まるハシブトガラス

SRC 玄関外側の張り紙

2 羽のスズメが図書館本館の壁にしがみつきながら木の実を引っ張り合っている。

であり、人間のような朗々とした声で互いに鳴き合う。彼らはキャンパスの中央ローンを人間がそうするように、楽しんで動きまわる。この鳥たちは餌を求めてゴミをあさるのを好み、極めて図々しく社会的である。ゴミ捨て場に設置してあるネットも、清潔な札幌の街並みを散らかし放題のピクニック場に変えてしまう彼らの障害にはなっていないようである。

SRC も、カラスのいる札幌生活について風変わりなコメントをしている。低空飛行で勢い良く襲いかかるように横切るカラスたちにヒッチコックの「鳥」を思い出した後、初めて SRC の玄関に到着した私を出迎えたのは「カラスに注意！」の張り紙だった。私は建物の中に入れば安全だと思っていたが、張り紙は屋内ではカラスはもっと厄介になると訪問者を警告しているように思えた。幸運にも善意の張り紙は単に間違った場所に置かれていただけであった。屋内のどこに行っても、危険を感じることはない。

スズメ (Passer mantanus) はヨーロッパと北アメリカのどこにでもいるイエスズメと双子と言っていいほどにきわめて近い近縁種である。この元気のいい、曲芸飛行をするスズメはおそらくカラスに次いで札幌で簡単に見ることのできる鳥であろう。この鳥たちは人間の居住地の近くで巧みに生活している。

ユーラシア全域で一般的なゴジュウカラ（Sitta europaea）は樹皮に生息する虫を捕らえる疲れ知らずの熟練した狩人であり、小さな体と針のようなくちばしはその目的に完璧に適っている。青灰色の背中と白と栗色の下半身、そして黒い目の帯を持つ生き生きとした活力の “球” が、敏捷ながら整然としたやり方で、木の幹に沿って上にも下にもたやすく移動する

姿は、しばしば私の目を捉えた。その鳴き声は心地よく多彩な、高い調子のトリルである。

シジュウカラ（Parus minor）の行動は近縁種のアオガラやアメリカコガラと似ており、後者とは見た目も鳴き声も似ている。私はよくこの生意気な小さな鳥を札幌のトウヒやマツやイチイの枝に見つけていた。

ヤマガラ（Sittiparus varius）は私がまれにしか見ることの出来なかった魅力的な鳥である。小さく活発で、灰色の翼と栗色の胸と背中を持ち、幅広で黄色のアクセントのある横向きの白い「マスク」が黒色の頭部を覆うこの小さな鳥は、一瞬だけであったとはいえ札幌平和塔を囲む深い森でのハイキングを忘れ難いものにした。後に１羽が私の外国人研究者宿舎のバルコニーに現れた。

凍える朝に SRC 近くの木の樹皮から昆虫をついばむゴジュウカラ

オシドリ（Aix galericulata）のような水鳥は大野池として知られるキャンパスの素晴らしい蓮池で家族を育て人間の鑑賞者を惹きつけている。私がそこにいた夏の終わりから秋にかけてはオスのオシドリは既に陰羽をまとっており、豪華で色鮮やかな婚姻色の衣装というよりは、くすんだメスのように見えた。オシドリは日本中に生息しているが、北海道では夏の繁殖期のみに滞在する。

私は北海道の名高い代表的な鳥である、釧路近郊の保護地のタンチョウやオオワシ（円山動物園のものは除くが）は見ることはできなかった。恐らくは次の機会になるだろう。しかし私は人間たちの街と並んで活気ある、小さな好奇心と我慢強い偵察に面白い色や音や活動で報いる鳥たちの街を発見した。目と耳とカメラを用いたある種瞑想的であり、ある種スリリングでもある探求は私の脳の本業とのバランスをうまく保った。鳥たちは、新たな友人たちとの出会いや、密度の高い研究活動への満足と並んで、SRC フェローシップが与えてくれた機会への私の感謝の念を深めさせたのだ。

（英語から佐々木祐也訳、宇山監修）

現代中欧におけるエスニック・アイデンティティの生成：シロンスクを題材に（連載３回中３回目）

ズビグニェフ・グレン（ワルシャワ大学、ポーランド）

すでに申し上げましたように、提案され、公的なものと認められている、すなわち、外部の認証を受ける可能性のある自己同一性の目録は、時代によって可変的でした。以前からのポーランド、ドイツ、チェコへの自己同一化の他に、シロンスク、河岸ポーランドが生まれ、また山地に住む人々には、シロンスクのベスキドまたはグラルというアイデンティティが生まれました。（外部における認識を含む）一般的な認識のうちに当該の自己同一性が存在する／存在しないことを公式化する、国勢調査という記録が重ねられるなかで、それらの申し出はさまざまな反響を呼び起こしました。例えば、河岸ポーランドとグラルは、国勢調査にお

いて時代的には第 2 次世界大戦終結までに限られ、それ以外の時代には現れませんでした。

一方、選択肢としてのシロンスク・アイデンティティ（それ以外のアイデンティティを選べないこともありました）が国勢調査に初めて登場したのは 1921 年、チェコスロヴァキアとの境界にあるシロンスクのチェシン地方での国勢調査において、それ以外のエスニック・グループとの関連で現れ、1939 年には独立した単位となりました。その運命は山あり谷ありでした。一例を挙げましょう。

チェコスロヴァキア	1921 年の国勢調査	1930 年の国勢調査
シロンスク人＝ポーランド人	21 607	20 150
シロンスク人＝ドイツ人	1 408	191
シロンスク人＝チェコ（スロヴァキア）人	24 299	10 106

1991 ～ 2011 年にチェコで実施された国勢調査の結果と比較してみましょう。

国勢調査	1991 年	2001 年	2011 年
シロンスク人	44 446	10 878	12 231

ポーランドで 2002 年に実施された調査にも、シロンスク人というグループが現れました。ポーランドの国勢調査では、17 万 3 千 153 人がシロンスク人、そのうち 5 万 6 千 643 人がシロンスク語話者を名乗っているのです。

2011 年に実施された最新のポーランド国勢調査では、シロンスク・グループの性格が一様でないことを考慮に入れたうえで、別の分類が提案されました。3 段階のシロンスク性が導入されました――ポーランド人／場合によっては、別の伝統的民族性（ドイツ、チェコ）を持っているがシロンスク人である人、シロンスク人だが別の民族的伝統を持つ人、ただ単にシロンスク人である人。次の結果はとても象徴的です。

民族的・エスニック的自己同一性	1 番目のアイデンティティ（最初の質問で表明されたアイデンティティ）	そのうち、唯一のアイデンティティ	2 番目のアイデンティティ（二番目の質問で表明されたアイデンティティ）	計――表明の数または順番とは関係がなく（すなわち、一番目または二番目の質問で表明されたアイデンティティ）*	そのうち、ポーランド人としてのアイデンティティを含むもの
śląska	**418 000**	**362 000**	**391 000**	**809 000**	**415 000**

* 数値は、2 つの質問への答を含む。データの和は出さない。

シロンスクのグループに対する調査結果の比較からは、3 万 2 千人（809000 — 362000 — 415000 = 32000）が、シロンスク性をポーランド以外とのアイデンティティ、すなわち、おそらくはドイツとのアイデンティティと結びつけて表明していたと推測されます。

むろん、地域グループの民族化プロセスに関しては、数回の国勢調査のデータを俟たなくては、信頼のおける尺度とはなりません。その証左となるのが、チェコのシロンスク地域において、（完全なものではないにせよ）「シロンスク性の撤退」です。

しかし、憶えておかなくてはならないのは、国勢調査は民族的なカテゴリーのレベルにおけるこうしたアイデンティティの外的な現れにすぎないということです。それは、民族的な諸概念の傍らで、2 番目の、個人的で、必ずしも（現実的な理由から）「表明する」に値するわけではないアイデンティティである、またはポーランドのシロンスク、チェコのシロンスク、ドイツのシロンスクといった地域的な、別のレベルの概念として、機能し得る、または機能してきたのかもしれません。すなわちこれは、公的文書（国勢調査もその一つです）において、表に出る可能性はあっても、必ずしもその必要はない、ある種の潜在的な可能性なのです。

今日この潜在的な可能性がシロンスク全域という規模でどのような状態であるのかという

問いは、未だ答えの出ていない問いです。答えはかなりの部分、近似値（概数）にすぎません――なぜならば、これまでに誰一人、シロンスク全域で、公的文書としての国勢調査と関係のない、オープンな性格を持つ、一定の方式による調査を行っていないからです。重ねて申し上げておきましょう――私はここで、オープンな、回答者に自己限定的な選択を迫らないような調査について述べています。

グレン氏　旧道庁前で

私は、この種の調査を、オルザ川の両岸にある、歴史的な意味でのシロンスクのチェシン地方に限定したはるかに狭い地域においてではありますが、1996年に実施いたしました。その調査は、特にチェコ側において、地域的・民族的集合の度合いが異なるなかで、グループと個人の両方の意味で多数のアイデンティティが共存することが記録されました。シロンスク性は、地域的自己同一性として、ポーランド性、チェコ性、そしてポーランド性とチェコ性と同時に組み合わされる可能性があったのです――これは、例えば、シロンスクのグラル・グループにおけるグラルとしての地域的なアイデンティティ（それが、シロンスク性と結びつく可能性もありました）についても同様です。シロンスク性が単独で機能することもあり得ましたが、この場合、それが民族的な特徴を表すのか、民族グループに帰属する必要がないことと結びついた地理的特徴を表すのかは、明らかでありませんでした。

シロンスク性が潜在的可能性としてこのような組み合わせを持つことは、最新のポーランド国勢調査でも証明されました。それは他の多くの資料でも証明されたことです――特に、インターネットにおける議論、社会活動、さらには日常生活のなかでです。

とはいえ、次の問いが現れます――これによって、シロンスク住民のアイデンティティとアイデンティティの組み合わせのすべての可能性が尽くされているのでしょうか？　考慮に入れるべきは、自らの出生から、シロンスクの地理的・文化的な風景――土地と人々――と文化的な側面で結びついていると感じている、すべての人々です。通常こうした場合には、「土着」という概念を用いますが、住民たちの土着の性格を区別化する基準は必ずしも明確ではありません。その場所に生まれ、祖父・曽祖父の世代からそこに留まっていることでしょうか？　グループが土着グループと認められるには、何世代を経なくてはならないのでしょうか？　これはいまだ答えの出されていない問いであり、東部に生まれ、下シロンスクに移住した人々の子孫にとっては重要な問いです。下シロンスクの住人たちは、シロンスクの人々と認められるのでしょうか？　もし今認められないとすれば、いつから？　基本的な意味で、これは彼らに向けて発せられた問いです。彼らのアイデンティティを調査する最初の試みもありましたが、その結果は、移住してきた人々のなかに辺境住民としてのアイデンティティが復活していることを示していました。と同時に、この土地のドイツ的伝統に依拠して、自らを下シロンスク地域と関係づけようとする、最初の兆しも現していたのです。ということは、まだ下シロンスクの地域的なアイデンティティは存在しないのかもしれませんが、間違いなく、土地への自己同一化――例えば、ヴロツワフ市民のヴロツワフ的アイデンティティ――は見られます。このグループは、歴史的な意味でのシロンスクにおける、地域的な、すなわち地方より小さなアイデンティティ（それとは別に、地方的なアイデンティティを育て上げることができるのか、という問題も現れてきます）を計る物差しの一端にいます。シロンスクのオパヴァの状況も似ています―

―これはこの地域で行われた研究結果の示すところでもあります。

もう一つのグループは、場所と地域的に自己同一化するのではなく、その場所が位置しているより広い領域との自己同一化を行う住民たちです。地方が多様化するにつれて、私たちは、シロンスク内部におけるさまざまな地域単位の誕生を目の当たりにしています。このような人々は、こうした自己同一性を民族的な自己同一性――ポーランドにおいてはポーランドと、チェコにおいてはポーランドと／またはチェコと、ドイツにおいては（シロンスクからの移住者）はドイツとです。こうした場合、人々は通常アイデンティティを地域レベルに置きます。しかし、二つ（ときにはそれ以上の数の）民族的アイデンティティの解釈もまた、大いに問題です（例えば、それは民族的に混淆した家族に生まれた子どもたちに現れます）。こうした現状は、他ならぬ最新国勢調査において、提案されました――そこでは、シロンスク性が民族性の水準を獲得したのです。もちろん私たちには、シロンスク的アイデンティティを可能性の一つとして表明する人々が、それを地域的なアイデンティティとして扱っているのか、他のさまざまなアイデンティティと同等の、民族的なアイデンティティとして扱っているのかは、わかりません。シロンスク性を唯一のものとして表明している場合は、おそらく民族性の表明なのでしょう。

グレン氏（向かって右）カニ料理家にて

ここから、シロンスク生まれの住民たちのアイデンティティを計るある物差しが、（さまざまなアイデンティティとの関係性を通して）見えてきます。

シロンスク性を伴わない「伝統的な」民族的アイデンティティ――シロンスクの地域（さまざまな小地域と／または全地域に関する）的アイデンティティと一体になった「伝統的な」民族的アイデンティティ――シロンスクの民族的アイデンティティと一体になった「伝統的な」民族的アイデンティティ

ここから推測できるのは、こうした尺度はシロンスク・エスニック・グループが誕生する（次に、ある種の外的条件を満たした後に、それは民族グループとなる）プロセス、国勢調査に「派生状態で」捕えられたプロセスを手本にしているということです。とはいえ、これは現在継続中のプロセスなので、どのように終わるかを予言することはできません――独立した民族の形成、さらには承認に終わるのでしょうか？　または、ある種の流行または現代の具体的な諸問題への回答がそうであるように、原因が突き止められるや否や、後退してしまうのでしょうか（チェコで繰り返し実施されている国勢調査の結果の移り変わりをご参照ください）。付け加えて申し上げたのは、このプロセスが最も強く現れているのは、上シロンスクとシロンスクのオポレ地方だということです。これらの地域において、このプロセスは最も遠くまで進行していますが、その証は、シロンスクを唯一の民族性として表明する人々の存在です。シロンスクの民族性の提示に対する土着の人々の回答がこのように一様でないことは、このような民族性の存在／形成を主張する人々にとって、ある種の厄介な問題を生み出しています。かなりの程度において、エスニック的差異化の条件としてシロンスク独自の歴史を援用する根拠を、揺るがせるからです。とはいっても、歴史は一度与えられればそれで終わりというものではなく、今日もまた作られつつあるものだということ――このことも注記しておかなくてはなりません。そこから、このプロセスが新しい民族の形成、さらには承認に終わり得るのかどうか、について疑

問を抱く人々の見解については、民族形成のプロセスは、現代のヨーロッパにおいてすら可能であるということを思い出していただきたく思います――今日でこそ承認されていますが、長きにわたって、隣接の民族（ブルガリア人、ギリシャ人）から認められなかった、マケドニアの人々のエスニック的、民族的、そして民族グループとしてのアイデンティティの差別化をご参照ください。同様にしてこの観点から興味深いのは、所謂「コソヴァル」という（今日ではまだ）コソヴォ出身のアルバニア人とされている人々の状況です。

従って、シロンスクの人々の場合、私たちは、どの程度における、新しいエスニック・グループあるいは民族グループの生成を目の当たりにしているのか、という問いには、次のようにお答えしなくてはなりません――社会的な意味におけるシロンスクのアイデンティティは混淆した、民族的な（すなわち民族たることを志向している）地域的なアイデンティティです。個人的な意味では、多かれ少なかれ固定してはいるけれども、いまだ流動しつつあるアイデンティティです。なぜならば、ある意味で、すでに民族化のプロセスを経験したエリート階級のメンバー、己れのアイデンティティ探しを行い、それを己れの人生のさまざまな段階において変化させてきた者たちの経験が、集合的なレベルで繰り返されることになるはずだからです。

（ポーランド語から久山宏一氏訳）

大学院だより

◆　松下隆志さんに楡文賞　◆

昨年 12 月に博士号を取得した、スラブ社会文化論専修博士課程出身の松下隆志さんに、北海道大学文学部同窓会から楡文賞が授与されることが決定しました。日本学術振興会育志賞受賞など、ロシア現代文学研究において卓越した研究業績があり、また、ソローキンをはじめとするロシア現代文学の翻訳出版活動を積極的におこなっている点が評価されました。授与式は 3 月 24 日の予定です。詳しくは、文学部同窓会のウェブページ <https://sites.google.com/site/eyubun/prize> をご参照ください。［宇山］

図書室だより

◆　The History of Modern Russian and Ukrainian Art, 1907-1930.　◆
Pt. 2 の購入

本誌 130 号（2012.8）において、IDC Brill 社の製作したマイクロ資料 The History of Modern Russian and Ukrainian Art, 1907-1930. Pt. 1 を購入した旨お知らせしましたが、その後昨年度までに Pt. 2 を購入し、全体を揃えることができましたのでお知らせします。

Pt. 2 は、マイクロフィッシュ 1064 枚から成り、93 点の書籍と 16 タイトルの雑誌を収録します。

書籍の中には、たとえば、批評家アブラム・エフロス（1888-1954）『マルク・シャガールの芸術』（1918）、『ナタン・アルトマンの肖像』（1922）、『S. チェホーニン』（1923?）、版画家アンナ・オストロウーモヴァ = レヴェヂェヴァの『自伝』（1935）、劇作家・批評家セルゲイ・トレチャコフ（1892-1939）の『芸術家 V. パルモフ』（1922）、『ジョン・ハートフィールド』（1936）、

芸術・技術大学ヴフテマスの『建築』（1927）があり、雑誌には、『芸術と芸術工業』第 1 巻～第 4 巻（1898-1902）、『モスクワの建築』第 1 巻～第 10 巻 4 号（1924-1934）、『生活と革命』第 1 巻～第 10 巻 4 号（1925-1935, ウクライナ語）を収録しています。

これらの資料のうち、書籍分については整理が完了しており、センター図書室で利用できます。雑誌分については、整理が完了していないものがあり、その部分については、附属図書館と連絡をとって対応させていただくことになります。［兎内］

学 界 短 信

◆ ロンドン大学スラブ東欧研究所創立 100 周年記念シンポジウム ◆

ロンドン大学中央門

昨年 12 月 14-16 日にロンドン大学スラブ東欧研究所 School of Slavonic and East European Studies（SSEES）が創立 100 周年を記念する国際シンポジウムを開催した。

シンポジウムのタイトルは “Socialism, Capitalism and the Alternatives: Lessons from Russia and Eastern Europe” である。下は 100 年記念シンポジウムのポスター兼プログラム冊子の表紙である。

シンポジウムの表題が示すように自らの研究所の歴史とスラブ東欧地域の現代史を重ね合わせ、さらに、今日のグローバル化時代を分析し、地域の将来をも見通そうという意欲的な問題設定だった。

開幕記念講演者にはフランスのリベラル派経済学者トマ・ピケティが招聘され、2014 年に刊行された話題の著作『21 世紀の資本 Capital in the 21st century』を基にした講演がおこなわれた。ピケティが資本主義社会における社会格差を問題視していることはここで改めて紹介するまでもないが、ピケティのあとに元ポーランド副首相で「ショック療法」（社会主義からの急進的な自由経済化）の発案者として有名なバルセロヴィッチを登壇させたのは、実によく考えられたプログラムであった。聴衆は二人の講演から、社会主義と資本主義を中長期的な視野で考える視野とヒントを与えられた。

初日に限らず、この 100 年記念シンポジウムでは学術畑の専門家と実務畑の専門家を並立的に招聘して議論させたり、さらにジャーナリストを交えて複数の立場から議論を深める工夫が随所でみられた。こうした配慮や工夫は、論議が狭い研究

者の枠内に収まらないようにするためであり、イギリス的なプラグマティズムの反映と言って良いかもしれない。

しかし、実務家やジャーナリストを交えた議論を重視する同研究所の姿勢には、研究所の生い立ちも関係していると考えられる。つまりこの研究所は第一次世界大戦下において、後にチェコスロヴァキア第一共和国の初代大統領となるT.G. マサリクが深く関与して創設されたのである。つまり同研究所は設立当初からスラブ東欧世界の現実的な動きと深い結びつきを持っていたのである。下の写真にあるマサリクの胸像と記念碑はスラブ東欧研究所の入り口近くに飾られてあり、いまでもマサリクはこの研究所の精神的な柱であり続けていると言っても過言ではないのかもしれない。

ジャーナリストや実務専門家を交えての議論がおこなわれたセッション

とはいえ、今回の100年記念シンポジウムは全く後ろ向きなものではなかった。むしろスラブ東欧研究の将来を強く意識したものだった。とりわけ3日目のプログラムには、それが見事に現れていた。第一は博士課程の大学院生を主体とする独自のセッションが設けられたことである。大舞台で自分の研究を発表することは若い研究者にとって高い緊張を伴う。実際にも、何人かの報告はややぎこちないものだった。しかし、100年記念を大学者の講演や回想で終わらせてしまうのではなく、若手研究者を世に送り出す場としても位置づけたことは未来志向の優れた企画である。

第二は現在の所長であるヤン・クビク氏が自ら新しい研究の方向性を探る報告をおこない、それに関連する研究者を招聘したパネルを組織したことである。テーマは“Empirical evidence about alternatives”であるが、クビク氏がこのテーマで主張したかったのは、地方社会がもつ柔軟性である。クビク氏は地方社会の柔軟性を「経験的な知」として実証し、これを社会主義や資本主義に対抗しうる「選択肢」として提示しようと考える。また、こうした地方社会が持つ力をレジリエンスとも表現していた。荒削りな議論ではあるが、所長として新基軸を打ち出そうという姿勢には、大いに啓発された。

クビク所長の問題提起

次ページの写真はシンポジウム参加者を招いたレセプション風景である。質素ではあるが、気取らずに、事務職員も含め、誰でも自由に参加して皆で一緒に100周年を祝う雰囲気は印

レセプション風景

象深いものであった。

スラブ東欧研究所の 100 周年記念シンポジウムは一部が動画としてネット上で閲覧可能となっている。興味のある方は以下でご覧下さい。［家田］

https://www.ucl.ac.uk/ssees/centenary

◆ 学会カレンダー ◆

2016 年 4 月 13-16 日 第 58 回 Association for Borderlands Studies (ABS) 年次大会　於リノ
http://absborderlands.org/studies/annual-meetings/
4 月 14-16 日 ASN（民族研究協会）第 21 回年次大会　於コロンビア大学
http://nationalities.org
7 月 7-8 日 スラブ・ユーラシア研究センター夏期国際シンポジウム
10 月 1-2 日 日本政治学会研究大会　於立命館大学
http://www.jpsa-web.org/2015/10/2016-1.html
10 月 14-16 日 日本国際政治学会 2016 年度研究大会（60 周年記念大会）　於幕張メッセ
http://jair.or.jp/
10 月 22-23 日 第 66 回日本ロシア文学会定例総会・研究発表会　於北海道大学
11 月 5 日 内陸アジア史学会 2016 年度大会　於 駒澤大学　http://nairikuajia.sakura.ne.jp/SIAS/
11 月 17-20 日 ASEEES（スラブ東欧ユーラシア学会）第 48 回年次大会　於ワシントン DC
http://www.aseees.org/convention　［編集部］

編集室だより

◆ 「シリーズ・ユーラシア地域大国論」第 5 巻 ◆
『越境者たちのユーラシア』（ミネルヴァ書房、2015 年）の刊行

本書は、センターが中核となった新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」の第 5 班「国家の輪郭と越境」の成果です。「シリーズ・ユーラシア地域大国論」の他の巻がロシア・インド・中国という既存の国家の枠を有意味な比較の単位にしていたのとは趣を異にし、国家の枠自体と格闘する人々の営みに目を凝らし、耳を傾けるべく努めました。また 16 世紀から現代までを視野に収める奥行きも併せ持っています。

長い制作過程で、ウクライナ危機、「イスラーム国」の出現、ヨーロッパへの難民の流入、テロの遍在可能性など、国家の輪郭が問い直される世界史的にも重大な変化がありました。それは序章と終章に色濃く反映されています。本書から今日的な課題に対する思考の糧も得ていただければ幸いです。［長縄］

山根聡　　序章　　国家の輪郭と越境
第Ⅰ部　越境と回帰
山根聡　　第 1 章　地域大国に生きるムスリム：近代化に揺れる新興知識層

長縄宣博　第 2 章　イスラーム大国としてのロシア：メッカ巡礼に見る国家権力とムスリムの相互関係
第 II 部　周縁からの戦略
山口昭彦　第 3 章　周縁から見るイランの輪郭形成と越境：あるクルド系名家の軌跡
吉村貴之　第 4 章　2 つの帝国とアルメニア人：民族運動に及ぼす地域大国の磁場
第 III 部　地域大国を語る
岡奈津子　第 5 章　「帰還民」へのまなざし：カザフスタンの在外カザフ人呼び寄せ政策と現地社会
シンジルト 第 6 章　口承史に映る国の輪郭：新疆ウールド地域における人・地・病
小松久恵　第 7 章　輪郭を描き出す：英国南アジア系移民文学に見るインドの姿
長縄宣博　終章　　地域大国と向き合う個人

◆ *Acta Slavica Iaponica* ◆

現在、37 号の編集作業の最終段階です。次号の締め切りは 2016 年 7 月 15 日ですので、どうぞふるってご投稿ください。

なお、今号から本誌に advisory board を設けることとなり、第 1 期は以下の方にお引き受けいただけました。

Sergei Abashin（文化人類学、サンクトペテルブルク・ヨーロッパ大学）、Victor Friedman（バルカン学、シカゴ大学）、Henry Hale（政治学、ジョージ・ワシントン大学）、Philip Hanson（経済学、バーミンガム大学）、Deborah Martinsen（文学、コロンビア大学）、Predrag Piper（スラヴ語学、ベオグラード大学）、Peter Rutland（政治学、ウェズリアン大学）、Svetlana Tolstaya（民俗学、ロシア学士院付属スラヴ学研究所）、Peter Waldron（歴史学、東アングリア大学）、Il′ya Zaytsev（歴史学、ロシア学士院付属東洋学研究所）。任期は 5 年を予定しています。［野町］

◆ 『スラヴ研究』 ◆

現在、修正稿の編集作業を鋭意進めております。力作ぞろいですが、63 号は例年になく本数の寂しい号になります。［長縄］

会　議（2015 年 11 ～ 12 月）

◆ センター共同利用・共同研究拠点課題等審査委員会 ◆

2015 年度第 1 回　12 月 12 日（土）
議題　1. 共同研究・共同利用公募課題の審査について

◆ センター運営委員会 ◆

2015 年度第 1 回　12 月 12 日（土）
議題　1. スラブ・ユーラシア 研究センター共同研究員の選考に ついて

◆ センター協議員会 ◆

2015 年度第 2 回　11 月 2 日（月）
議題　1. 助教人事に関する選考委員会報告について
2. 客員准教授候補者の選考について

2015 年度第 3 回　11 月 6 日（金）

議題　1. 助教人事に関する選考委員会報告について
2. 定年退職予定教員の再雇用について

2015 年度持ち回り　12 月 15 日（火）～ 12 月 21 日（月）

議題　1. 本学外国人招へい教員制度への応募者（2016 年度 公募分）の選考について

［事務係］

みせらねあ

◆　Ljudmila Popović, Dojčil Vojvodić, Motoki Nomachi 編　◆
U prostoru lingvističke slavistike: Zbornik naučnih radova povodom 65 godina života akademika Predraga Pipera が刊行される

2011 年にセンターで特別講義をおこなったこともある、セルビアのスラヴ語学者 Predrag Piper 教授の生誕 65 年記念論集『スラヴ言語学の空間の中で』が刊行されました。ヨーロッパ、ロシア、アメリカなど世界各地から主に文法研究を扱う 40 を超える論文が寄稿され、合計 800 頁をこえる大部になりました。なお、表紙の素晴らしいデザインは、センターの笹谷氏によるものです。200 部しか刊行されませんので、関心がある方はどうぞお早めにお求めください。［野町］

◆　人物往来　◆

ニュース 143 号以降のセンター訪問者（客員、道央圏を除く）は以下の通りです（敬称略）。［田畑／大須賀］

11 月 17 日　藤本透子（国立民族学博物館）
11 月 19 日　Raja Mohan（オブザーバー・リサーチ財団、インド）
11 月 28 日　磯貝真澄（京都外国語大）
12 月　2 日　堀江典生（富山大）
12 月　3 日　西山克典（静岡県立大）
12 月　7 日　重松尚（東京大・院）
12 月9-11 日 Clare Anderson（レスター大、英国）、Bostjan Bertalanic（城西大）、Cloe Drieu（フランス国立科学研究センター）、Deha Erpek（駐日ハンガリー大使館）、FENG Shao Lei（華東師範大、中国）、HA Yong Chool（ワシントン大、米国）、Viktor Larin（歴史・考古学・民族学研究所、ロシア）、Paul Richardson、Istvan Szerdahelyi（駐日ハンガリー大使）、Hans Carl von Werthern（駐日ドイツ連邦共和国大使）、DA Zhigang（黒竜江省社会科学院）、LIU Shuang（同）、SHA Xin（同）、WANG Yanfang（同）、HUANG Suying（黒竜江省対ロシア文化交流協会）、HUANG Yubin 同）、XIAO Shuyun（同）、YANG Yannan（同）、ZHANG Xuekui（同）、ZHANG Yelong（同）、赤尾光春（大阪大）、池田嘉郎（東京大）、石崎宏明（文部科学省）、泉川泰博（中央大）、伊東孝之（北大名誉教授）、今井宏平（明治大）、岩﨑一郎（一橋大）、岩田昌征（千葉大名誉教授）、上垣彰（西南学院大）、梅原季哉（朝日新聞社）、大津留厚（神戸大）、大野正美（朝日新聞社）、岡奈津子（アジア経済研究所）、岡洋樹（東北大）、辛島理人（関西学院大）、河西陽平（慶應義塾大）、川端香男里（東京大名誉教授）貴志俊彦（京都大）、北村行伸（一橋大）、木村崇（京都大名誉教授）、木村汎（北大名誉教授）、久保山亮（専修大）、雲和広（一橋大）、黒岩幸子（岩手県立大）、黒木英充（東京外国語大）、佐々木孝典（文部科学省）、佐藤雅彦（翻訳者）、佐原徹哉（明治大）、篠原琢（東京外国語大）、志摩園子（昭和女子大）、下斗米伸夫（法政大）、Yaroslav Shulatov（広島市立大）、外川継男（上智大名

誉教授)、豊川浩一（明治大)、中山大将（京都大)、錦田愛子（東京外国語大)、沼野充義（東京大)、野坂潤子（ビルケント大、トルコ)、長谷川毅（カリフォルニア大、米国)、服部文昭（京都大)、林忠行（京都女子大)、日笠里香（九州大)、日臺健雄（埼玉学園大)、藤本和貴夫（大阪経済法科大)、船本早紀（九州大)、松原孝俊（九州大)、皆川修吾（北大名誉教授)、六鹿茂夫（静岡県立大)、盛田常夫（立山 R&D ヨーロッパ KFT)、山井敏章（立命館大)、湯浅剛（広島市立大)、和田春樹（東京大名誉教授）

12 月 12 日　浅野豊美（早稲田大)、金野雄五（みずほ総研)、佐藤隆広（神戸大)、塩出浩之（琉球大)、柴田陽一（京都大）、福味敦（兵庫県立大)、丸川知雄（東京大）

12 月 16 日　Pavlo Gritsenko（ウクライナ学士院ウクライナ語研究所）

12 月 18 日　Alexander Gabuev（カーネギー財団モスクワセンター、ロシア）

1 月 19 日　齋藤宏文（東京工業大）

1 月 25 日　Tuyara Gavrilyeva（北東連邦大、ロシア）

1 月 26 日　Alexander Bukh（ヴィクトリア大学ウェリントン、ニュージーランド）

1 月 27 日　Kornelia Ichin（ベオグラード大、セルビア）

1 月 29 日　Simona Leskovar（駐日スロヴェニア共和国大使)、半谷史郎（愛知県立大）

◆　研究員消息　◆

田畑伸一郎研究員は 2015 年 9 月 2 ～ 13 日の間、“Russia's Arctic Energy Policies in a New Political Context” への出席、現地調査、研究打ち合わせ及び資料収集のため、フィンランド、ロシアに出張。10 月 21 ～ 24 日の間、北海道・サハリン州友好・経済研究推進協議会第 16 回合同会議出席、聞き取り調査、現地調査のため、ロシアに出張。10 月 27 ～ 31 日の間、COPERA 会議出席（於ロシア科学アカデミー・シベリア支部・生物学・氷晶研究所）のため、ロシアに出張。11 月 18 ～ 24 日の間、“47th Annual ASEEES Convention” 出席・研究発表のため、米国に出張。

野町素己研究員は 9 月 16 ～ 22 日の間、国際スラヴィスト会議スラヴ語文法構造研究部会年次集会出席・研究発表・研究打合せのため、ロシアに出張。11 月 15 ～ 25 日の間、“47th Annual ASEEES Convention” 出席、研究打合せのため、米国に出張。12 月 1 ～ 9 日の間、現地調査、研究打合せのため、セルビアに出張。

越野剛研究員は 10 月 8 ～ 13 日の間、“2015 WCAAS Meeting” 出席・研究発表、研究打合せのため、米国に出張。10 月 29 ～ 11 月 1 日の間、国際カンファレンス “Redefining Eurasian Territories: Governance, Perceptions, and Identities” 出席・研究発表、研究打合せのため、韓国に出張。12 月 18 ～ 20 日の間、第 18 回ソウル大学・北海道大学ジョイントシンポジウム分科会出席及び意見交換のため、韓国に出張。

家田修研究員は 11 月 8 ～ 25 日の間、ロンドン大学スラブ・東欧研究所創立 100 周年記念国際会議出席、資料収集、現地調査、意見交換のため、ハンガリー、英国に出張。12 月 15 ～ 28 日の間、現地調査、研究打合せのため、英国、ウクライナに出張。

兎内勇津流研究員は 11 月 15 ～ 22 日の間、近世・近代アイヌ関係資料の調査、および研究打合せのため、ロシアに出張。

ウルフ・ディビッド研究員は 11 月 18 日 ～ 12 月 1 日の間、“47th Annual ASEEES Convention” 出席・研究発表、資料収集のため、米国に出張。

宇山智彦研究員は 11 月 22 ～ 27 日の間、現地調査（日本国際問題研究所の委託調査の一環）のため、ウズベキスタンに出張。

望月哲男研究員は 12 月 18 ～ 20 の間、第 18 回ソウル大学・北海道大学ジョイントシンポジウム分科会出席及び意見交換のため、韓国に出張。　［事務係］

目　次

研究の最前線 1

センター設立 60 周年記念国際シンポジウム・祝賀会開催される／センター設立 60 周年記念プレシンポジウム「ユーラシアから見た中東難民と欧州統合」の開催／岩下・宇山両教授が北大の研究総長賞を受賞／ボーダースタディーズ福岡シンポジウム「領土という『呪い』を考える」開催／スロヴェニア大使がセンターを訪問／ 2016 年度「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究」に関する公募結果／専任・非常勤研究員セミナー／ 2016 年度鈴川・中村基金奨励研究員募集中／研究会活動

ヒヨドリの日々 12

by ダニエル・プライア

現代中欧におけるエスニック・アイデンティティの生成：シロンスクを題材に（連載 3 回中 3 回目）

by ズビグニェフ・グレン 15

大学院だより 19

松下隆志さんに楡文賞

図書室だより 19

The History of Modern Russian and Ukrainian Art, 1907-1930. Pt. 2 の購入

学界短信 20

ロンドン大学スラブ東欧研究所創立 100 周年記念シンポジウム／学会カレンダー

編集室だより 22

「シリーズ・ユーラシア地域大国論」第 5 巻『越境者たちのユーラシア』（ミネルヴァ書房、2015 年）の刊行／ Acta Slavica Iaponica ／『スラヴ研究』

会議 23

センター共同利用・共同研究拠点課題等審査委員会／センター運営委員会／センター協議員会

みせらねあ 24

Ljudmila Popović, Dojčil Vojvodić, Motoki Nomachi 編 *U prostoru lingvističke slavistike: Zbornik naučnih radova povodom 65 godina života akademika Predraga Pipera* が刊行される／人物往来／研究員消息

2016 年 2 月 26 日発行

編集責任　大須賀みか
編集協力　望月哲男
発行者　田畑伸一郎
発行所　北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター
060-0809 札幌市北区北 9 条西 7 丁目
Tel.011-706-3156、706-2388
Fax.011-706-4952
インターネットホームページ：
http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/